クライストとロマン主義（その一）

松　沢　芳　郎

1. 仏墺戦争におけるドレスデン（1809年）

Kleist の1807年から1809年までのドレスデン滞在の後に来た戦争の嵐は，ドレスデンでの Kleist の充実した作家生活の跡を消してしまったが，そのドレスデンでの作家活動を述べるにあたって，時間的にはその後に来る1809年の戦争から述べよう。

ドレスデンはライン同盟国ザクセンの首都で，ナポレオンの勢力範囲の中にあった。オースタリーとプロシャの間という地理的事情が，1809年の来るべき戦争にとって重要な意味を持った（実際また1813年にはライプチヒの決戦が行われた）。

オースタリーはスペインの例に誘発されて，ナポレオンに対する全体反乱をさしあたりザクセンの中で行おうとする。この方策の始まりはすでに1809年に起った。すでにそれ以前にオースタリー大使はドレスデンから外交戦争を開始し，フランスの勢力を世論ではばみ，中部や北部のドイツ愛国者たちを来るべきオースタリーの蜂起の為に味方につけ，ナポレオンに対する戦を準備する為に，知識人をまわりに集めた。全ヨーロッパではかつて無かった程に熱病的緊張が支配していた。

Josef Nadler はその Kleist 研究の中で，詩人 Kleist がオースタリー大使にとっていかに貴重な人物であったかを指摘した。Buol たちは恐らく Kleist の詩作にも関心を持ったが，この時期彼らにとって政治的作家ということがもっと重要だった。Kleist は彼らの期待を裏切らなかった。熱狂と献身でプロシャ・ユンカー達はオースタリーの事件を我が事としている。オースタリーは彼らの大きな希望だった，それで彼らはオースタリーと組んだのだった。しかし Kleist は完全に独自の立場を示し，A. Müller とか Gentz とかいった人々が公けの立場でオースタリーに奉仕したようにその隷属下にあったのではなく，ドイツの自由の為にオースタリー側に味方し，オースタリーの為に起ったのだった。

この時代の Kleist の詩作や著述は彼がオースタリーの為に演じた役割を明らかに語っている。しかし彼がオースタリーに味方した実際の方法，結びつきがどういうものであったかの詳細は不明である。ただ彼は恐らく全ドイツに戦争を迫った秘密の愛国同盟と共に働いたと考えられている。オースタリーの貴族の大部分は全力を挙げてナポレオンに対する全面戦争に尽力し，特にプロシャの加入に努力したのである。

そうした情勢の中に Kleist の政治的著述が現われた。これら短いが非常に効果的な論文や論説はオースタリー的意識で纏められており，ライン同盟の，ドイツ人にとって不面目な精神を破棄し，フランスの策略や術策を欺瞞としてあばき，天下の人々を至る所で蜂起へと駆り立てることをねらっている。殊に「Die Hermannsschlacht」は傑出したものであった。

Kleist はオースタリーの対仏宣戦布告の4月8日に Ulrike に(B147)*，自分は戦争の勃

---

* H. Sembdner 編全集（1984），Bd. 2 の書簡番号略記である。

発に際して皇帝の大使と共にドレスデンを発ってウィーンへ行くつもりだ，だが自分にはさしあたりまたしても金がない，と報じた。（この手紙の中で彼は Ulrike に会いたいと言い，その結果債務証書の署名（B148）が明らかにするように4月14日に会った。）

この時の彼の計画や意図は詳しくは知られていないが，恐らく全てオースタリーに関係し，当時の状況に添うものだったと想像される。オースタリー軍は国境を越えて勝利を重ねた後迅速に全バイエルンを占領し Böhmen にも布陣する。フランス軍とザクセン軍は退却し，ザクセン王のドレスデン宮廷も蒙塵する。しかし Landshut と Regensburg をめぐっての戦斗の後 Eckmühl 付近でナポレオンが大勝し，ドレスデンのオースタリー大使は町を去る。Kleist は当然身の危険を感じ急拠出発する。A. Müller はこの時多分 Sophie v. Haza を顧慮してドレスデンに残った。Kleist の出発に関しては殆んど誰も注意を払わなかった。この幸福に歓迎されて1807年に始まったドレスデン時代は失敗と失望の中で終り，彼のその後に暗い影を焼きつけた。Teplitz で Buol に追いつけると彼は思っていたが，もはや会えなかった。(Dahlmann は後年彼らの一緒の体験についての報告を書いたが，それは脱漏があり多くの証明し難い誤謬が含まれている)。

5月2日に F. v. Pfuel に伴われて Knesebeck が Peterswalde に到着し，Kleist と Knesebeck が同時にオースタリーの国境駅 Teplitz に到着した。Knesebeck は旅券が Berlin のオースタリー大使 Wessenberg 男爵によって交付されていたにも拘らず，皇帝の顧問官 Eichler に裏書されるまで止め置かれる。それで Knesebeck と F. v. Pfuel はその裏書の為に文書の嘆願書を書く。Eichler は裏書をして，その事を Teklitz から5月3日，上級の役所，プラークの市守備隊長 Kolowrat 伯に報告し，「そちらへ Kleist 氏と Dahlmann 氏も，Buol 氏の友人であるが，明日 Aussig（地名）の郵便馬車で出発する」（L325）と付け加えている。5月3日に Kleist が Teplitz から「姉さん，貴姉にいささか急いで報告し委託する為に簡単にしたためます。4月29日に僕は Dresden を発ちました。貴姉にも言いましたように一緒に旅行しようと思った Buol は先に行ってしまっていました，そしてまたこの Töplitz でも彼とは会えませんでした。……それではお元気にお暮し下さい，再び会えても会えなくても，貴姉の名は僕の唇にする最後の言葉でしょう，そしてあの世で僕の最初に考えることは（もしお許し下されば）再び貴姉の所へ戻ってゆくことでしょう」（B150）と姉に書いている手紙は，それ故出発の少し前に書かれているに違いない，そして詩人が非常に危険な出発をした事をこの手紙の憂鬱な別れの言葉からうかがい知る事ができる。Kleist より数日前に Ernst v. Pfuel はプラークに着いていて，Kleist も知っている Karl von Nostitz との共同の仕事を始めていた，この Nostitz は義勇軍の結成にと努力していたのだった。Kleist のプラークへの到着（5月3日）について我々は官庁の書類から日付以上の事を知ることができる。Kolowrat 伯はただ他国人の身分等を報告する事を命じただけでなく，多分他国人を監視する事も命じた，即ち古いオースタリーの警察用語で言えば，特に彼らの文通に気をつけ嗅ぎ出す事である。その結果5月6日に Kolowrat 伯は Wien へ「三人の他国人（即ち Knesebeck と Fr. v. Pfuel）は成程可と評定はされるが，実際はプロシャの探偵である」と書き加えている。Kleist がドレスデンで一緒に働いたプロシャの愛国者仲間の代表者たちも Böhmen に現われそして恐らくその一部はそこでも Kleist と共に努力した。5月6日に，それ故 Kleist のプラーク到着直後，侍従 Ernst von Voss (1779～1832) がプラークへ，彼の友 Ferdinand von Schill への援助を求める為にやって来てい

た。なお同日彼は Kolowrat に Schill の計画を報告している。5月6日の Kolowrat から上官への報告は Schill の大胆さについての彼の感激ぶりを示している。

Kleist の到着時におけるプラークの状態をみると，町の精神生活はすでに1807年から，ドイツ各地の亡命者達からの影響を受けていた。ナポレオンに対する戦への住民の覚悟はとりわけ数多くの太っ腹の人の大口の献金に表われていた。北方への最も重要な交通路での国境の近くにありながら，軍事的政治的報告や噂の飛び交う所であり，またオースタリー軍の作戦中心地であった。Böhmen の司令官，J. S. v. Riesch (1750～1821) 将軍に，例えば1809年6月と7月にザクセンとバイロイト各地で作戦を立てた軍団が従っていた。Riesch と Wallis はフランケン軍団と同じく Braunschweig—Oel 大公の義勇団を構成する交渉にも関していて，それに所属する多くの人達もプラークには多数集まって来ていた。Kleist のこのプラーク滞在は長くは続かない，というのは5月20日には彼はすでにウィーンの近くに居り，その前の数日間 Znaim で過ごしたからである。Znaim では彼は Knesebeck と同宿し，ピストル発射の挿話にみられる日を過ごした。また Kleist と Buol の間の密接な共同作業も考えられてもよく，5月12日に Znaim でまとめられた Philipp von Stadion 宛 Buol の手紙は5月前半におけるプラークと Znaim における Kleist の数日間の滞在の解明の資となる。Buol と Zichy は5月4日にプラークで出逢い，そこでウィーンへ帰る Stadion の指示を見つけた。大使館文書を Kolowrat 宅に保管した後，Buol は5月7日にプラークを去った，勿論彼にはすでに Znaim の手前でプラークへ帰れという Zichy の指示がフランス軍におびやかされたウィーンから届いていた。Kleist は，Buol に割当てられていたのと似たような役割を，5月14日以来同じく Znaim に滞在していた F. Schlegel が Stadion の陸軍兵站部で占めたように，引受ける事を希望していたのだろうか。Wien がすでにフランス軍に占領されているので，彼らは Donau 左岸に留まっていなければならなかったし，Kleist と Dahlmann は Stockerau の宿に泊っていた。ここに Badetzky 少将の本営があって，彼はオースタリー軍右翼の前線を指揮していた。彼らが他国人として特別な許可なしにその場所に止り得なかったであろう事は明白である。

Dahlmann が語るように，5月21日早朝2人が軍人将棋に興じていた時，Aspern の戦が始まった。二人が Bisamberg へ出かけた，そこにはオースタリー軍の右翼が監視哨を置いていた。ここから Kleist は双眼鏡で戦の帰趨を追った。彼はフランス軍団の大突撃を朝に，Aspern と Essling をめぐる激しい戦斗，オースタリー軍の反撃を昼に見る事ができた。そして最後にオースタリー軍の光栄ある勝利を見る事ができた。5月25日の Kleist の興奮した手紙は (B151)，彼がどれほど Aspern の戦の後に歓喜していたかを示している。察するに彼は以前戦争や反乱へのプロシャの参加の可能性を懐疑的に考えていたが，彼は今や「一瞬たりともプロシャ王が，そして王と共に全ドイツが起つ事を」疑わない。この手紙はまた Kleist が当時もう一度特務機関の職務にたずさわり，愛国的な考えを持つプラークやドレスデンの友人知己に，その中に Knesebeck もいるが，戦斗について報告した事を示している。彼は例えば，Knesebeck の Aspern の戦についての報告がプロシャ宮廷における愛国者の立場を強めるだろうと想像する。Kleist の陳述は，彼がオースタリーの統師部へ結びついていた以上に重要だった。

Aspern の勝利はさて詩人に新しい希望を開くようにみえた。だが数日後に彼は再びプラークにある。何が彼を動かしてそれほど急に Donau 河岸の戦場を去らせたのか，我々は知

らない。今度は半年プラークに止まった。彼がプラークへ帰着（5月31日）した後，プラーク住民の勝利の祝典行事がいろいろと催された。Wallis によって個人的に行われた Aspern の祝典は6月1日に行われた。全ての劇場が芝居を上演し，それによってかなりの額の金が集められ，Wallis はそれを Karl 大公に献じた。どれほど大公が歓呼の中心にあったかは，上演後に Groß ist Carl という歌が歌われた事からも明らかである。勝利の軍司令官への歓呼のこの雰囲気の中で Kleist は多分彼の大公への第二の詩を書いたのであろう。1808年4月から1809年5月13日まで続いたフランス軍による Wien 占領期間に「Vaterländische Blätter für den österreichischen Kaiserstaat」が出ていた。それはいろいろの形で国内外の新聞によって利用され，そしてその弘布を P. v. Stadion は各国大使館に既に1803年3月から依頼していた。Aspern の勝利後すぐウィーンで沢山の新聞の発行が求められ計画された。F. Schlegel は迅速に各方面と交渉し1809年6月24日から12月16日まで「Österreichische Zeitung」を出したが，それは専らオースタリー国内のみの販売とは決められていなくて，恐らくこの新聞が Kleist の Germania 計画と部分的に交叉し，遅ればせながらそれに影響したと思われる。この頃出ていた「Beireuter Kriegs-Blätter」もまたドイツ人の抵抗心をあおり，ナポレオンの宣伝をはばんでいたと思われる。この Ernst v. Pfuel によってオースタリー軍の Bayreuth 占領期間中の1809年6月半ばから7シリーズ出された新聞は Germania と競合するものではなかった。それは全く一地方の限られた読者に向けて書かれていたし，短期間に過ぎなかったからである。

1809年6月，Kleist には Buol のかつての秘書を通じてと，Buol が彼に仲介した知人達を通じて，プラークで新しい活動領域が開始されようとしているかのようにみえた。「5月21，22日以後はすばらしい時期でした。僕は愛国的週刊誌へと予定していた幾つかの論文を Kolowrat 伯の家で朗読する機会を得ました。この週刊誌を成就させる考えが良く理解してもらえ，他の人々が僕の代りに出版社を見つける事を引受けてくれました。その賛同を得る為には請願しなければと皆が思っていました。生まれてからこんなに悦ばしい未来を期待させるのに，これだけの事がまとまったのは初めてです」（B153）とKleist は書いている。続けて6月13日に F. Schlegel 宛の手紙にあるように，Wallis 伯を通じて，「Germania」という名前で週刊誌を出す許可を求める請願が政府に出されて，Philipp Stadion 伯に披見された。（しかしこの請願は今日まで発見されていないし，Wallis 伯が6月13日に大臣に伝達しただろうと思われる同封の書簡も発見されていない。）P. Stadion 伯は Wallis に「1809年6月17日に Wolkersdorf」から次のように答えた（実際は草案だが），「13日の貴簡の答案のうち，政治的雑誌を出版するという H. v. Kleist の提案を私は大臣に提出しました，そして閣下に今日の最後の決心について報告するにやぶさかではありません」と。

一方オースタリーでは6月8日に予備軍への命令がでた。

6月10日におこるバイロイトやザクセンへの大成功の進軍は隣接するプラークの人々の勝利の気持を新たにした。即ち6月9日にオースタリー第11軍団は Carl Friedrich 将軍の命令で Tepliz からザクセン国境を越えて進軍を開始した。Braunschweig 大公の義勇兵団（黒い軍団）は Aussig からザクセンへ進入した。6月10日，両兵力は Dippoldiswalde で合一し，6月13日に「ザクセンに進入したオースタリー軍団の総司令部は今月10日 Dippoldeswalde に来ました。ドレスデンで指揮する〔ザクセン軍団の〕Thielmann は激烈な布告を出しました。Braunschweig 軍団もザクセンに……」（B152）と Kleist は報じている。殆んど

戦斗経験のない Thielmann 司令官の指揮下で劣勢なザクセン軍によって占領されていたドレスデンは放棄されねばならなかった。6月11日夜オースタリー軍はザクセンの首都ドレスデンへ入った。印刷して配布され，1部3クロイツェルで売られた公報は次のように報じている。「プラーク発1809年6月13日。今到着した報告によれば，将軍の軍団は今月11日午後2時に Dippoldiswalde からドレスデンに進軍を開始し，すでに7時には将軍は，市長が代表者たちと一緒に彼を出迎え，町の鍵を渡し，町を将軍の恩恵にあずけた後に，市に入城した。オースタリー軍の出現で町中のあらゆる通りの歓呼の声は絶える間がなかった。"Franz 皇帝万才！Karl 大公万才！"。ドレスデンの市民達からこのオースタリーに示された非常な熱狂は言葉に尽し難い程で，オースタリーにとっては最大の名誉となった」と。この間に Wallis は P. v. Stadion 伯宛1809年6月13日の手紙の中で，Buol のドレスデン派遣の為に尽力している旨を伝え，Stadion が彼を6月17日にザクセンの地方兵站官に任命した。A. Eichler が6月12日から彼が前にいたザクセンの首都への出発を要求している。ドレスデンの解放直後，オースタリーの A. I. Fürst v. Lobkowitz は市司令部を設置した。この Fürst とすでに以前から親しかった A. Müller ははっきりとオースタリー側につく事を宣明し，Fürst 司令官に勤務につく事を願い出た。

6月11/12日の夜，ドレスデン郊外で露営するザクセン軍司令官 Thielmann は百名の別動隊を町へ向け，オースタリー占領軍を威嚇射撃や怒声で脅した。オースタリーの前哨は退却し，それがその夜の非常呼集となって Braunschweig 大公はその指揮する軍団でザクセン軍を撃退し，それを更に追撃した。オースタリー軍入城の第一夜のこの戦斗事実は，軍事的事件の真の事実関係を洞察することのできなかった町の住民を深い不安に陥らせた。それで6月12日に Fürst von Lobkowitz 司令官はドレスデンの市民に公示した，「皇帝陛下の軍団は6月11日夕6時に軍楽を奏し旗をなびかせてドレスデンに入城し，この町の住民の側からも落着いた喜びで歓迎されました。その歓迎はドイツの兄弟でかつての同盟者を歓迎し，それでもその国王に忠誠を尽す国民に期待されておりましたものです。皇帝軍の優勢によって予測されますのは，ドレスデン近郊の陣営にいました王国軍が自分達に対してみられる保護を迅速な退却に利用しその不幸な経緯から引き起こされた隣国同志間の戦争の災害を全く無益な攻撃で増加させない事です。それにも拘らず皇帝軍の到着の数時間後，王国軍側が攻撃を仕かけて来て驚かされは致しましたが，相手は撃退され，かなりの皇帝軍が戦場で敵軍の許に派遣されております。これ以上誤りを繰返して無益な流血をひきおこさせない為です。この寛大な措置がザクセン軍の指揮者に理解されない事態となれば，勇敢なザクセンの国民は今や誰の責任で，結果としておこる不幸な現在の争の結果がおかれているかを判別する立場におかれるのです。町司令官」と。Fürst von Lobkowitz には6月14日の Am Ende 将軍からの軍団命令によって町司令官の職務が裏書きされている。彼には政治的監督官としてザクセン官庁との連絡の為，Beierwerk が付けられていた。彼は上部ザクセンにおける文官行政の長官で，Wallis を長とするプラークの Böhmen 州議会と頻繁な職務上の連絡があった。その政治的職務において Beierwerk が利用したのが A. Müller の筆力である。1809年6月23日に送られた Am Ende 将軍宛の書面がその事を語っている。つまりそれは A. Müller がまとめて書き上げたものに Beierwerk がただ署名しただけであった。その書面は，ザクセンに進軍した軍団の規律の無さについて，特に Braunschweig 大公の義勇公団についての厳しい苦情が Franz 皇帝の耳に達し，皇帝が自ら非常に厳しい軍規を要求する命令を

下した事を伝えている。A. Müller はその命令を Am Ende 将軍に直ちに伝え，これについて彼も関係しているBraunschweig 大公を理解することも彼に頼み，彼が軍事的職務の経路として Fürst von Lobkowitz 町司令官に端的に報告した事をあやまっている。この際彼は Am Ende 将軍自身がもともとすでに必要な措置を講じた事の了解をも求めている。6月13日に Am Ende 将軍は Willdruf から次のような軍団命令を出している。「余が余のベーメンからの進軍に際して下した命令の中で全軍団に厳しい軍規の遵守を命じたにも拘らず，すでに多数の当地住民からあらゆる種類の無法な略奪，強奪，暴行行為についての切実な訴えが届いている。余は強盗団の首領でなく，正規の軍規厳正な軍の指揮者でありたい。当地の，我々に好意を抱く田舎の人々をその余り提供されすぎる調達に強制することは必要ではなく，全てが秩序正しく行われるだろう。誰にも納得のゆく，秩序正しい割当てによる徴発が策として講じられている。余は暴行が外国軍隊によって行われたという許しをもはや今後とらない。というのは残念乍ら余は自ら，我が軍の特に軽装部隊が各地で恥ずべき，乱暴な無規律な不逞の徒として振舞った事を疑いなく受け入れざるを得なかったからである。余はここで最後に余の名誉にかけて告示する。最近の甚だしい乱暴行為，略奪，不正行為が住民に証言されるならば，直ちに情状酌量の余地なく，軍法会議に付され銃殺刑に処せられるべきであると。当該の司令官達は特にその点に責任を持ち，その名誉にかけて責務を果たすべきものである」と。

このオースタリーの支配はドレスデンでは長く続かなかった。Jérôme von Westfalen 王の下で救援にかけつけたはるかに優勢な二つの Westfalen 軍団の戦力の前に屈して Am Ende 将軍は結局再びベーメンに退却せねばならなかった。6月29日午前にオースタリー軍の主力は町を去り，昼1時には最後の兵もドレスデンを捨てた。6月30日夜11時ザクセン軍は空になったドレスデンの町を奪還した。A. Müller はオースタリー軍と同時にドレスデンを去る事はできたであろう。ところが何故彼がその後も同地に留まっていたのかは，自分の立場の重大な事は知っていた筈であるから，判らない。恐らくは自分の財産を見捨てたくなかったのだろう。彼はザクセン軍の入城後すぐさま逮捕された。謀叛人として扱われ，彼をフランスへ追放する考えもあったが，恐らく彼がドレスデンで数年間培った人気への顧慮と彼がプロシャ市民であるという事情からドレスデンの町からの追放のみにとどまった。

さて Aspern の戦はドイツの愛国者やオースタリー人の沈みきった希望に新しい活気を与えた。がそれも数週間しか続かず，Wagram の決定的敗戦（1809年7月5/6日）を迎える。その敗戦はまた Karl 大公の名声をも害う結果となった。それはしかし Aspern の戦の直後の時期にすでに，Gentz を含む極く少数の人間が予感した事であった。A. Müller は7月に，Phöbus の失敗後の非常な経済的な逼迫の中にあったのでドレスデンからベルリンへの旅を徒歩で行かなければならなかった。彼は父親に Berlin で暖かく迎えられ，彼について来た Sophie v. Haza と8月6日に結婚して新しい世帯を持つ事ができた。「私が1809年に長く不在にしていたベルリンへ帰って来た時，父は私の家庭的処遇に何もなし得ない哀れな状態にいた。それでも父は古い家具を私に分けてくれた。一方私自身はフランス人によって押しのけられ助けのない状態にいた……」という。Wagramにおける敗戦と思いがけず早く7月12日に Znaim で結ばれた休戦協定はナポレオンに敵対する側にとっては辛い試練だった。スウェーデンの外交官 K.R. Bildt も，プラークで人々が敗戦以上に休戦協定に驚いている事を伝えている。A. Müller の退去後7月13日にところが Fürst von Lobkowitz は再

びドレスデンを占領するのに成功し，再び町に軍司令部を置いた。彼の最初の処置の一つは A. Müller の受けた屈辱的な措置への報復だった。つまり彼は Müller の追放を主張した警察委員会の長 Brand を入牢させた。だが今度のオースタリー軍支配は短期間で，7月17日にオースタリーとザクセンの間で結ばれた休戦協定は一切の戦斗行為を終らせた。

Kleist の7月17日の Ulrike 宛の，種々な情報の直接の印象の下にまとめられた手紙は，彼の愛国主義が，彼のしばしば挫折させられた自己充実への努力と最も緊密に結びついたテーゼである事を裏づけている。即ち彼は殆んど政治的軍事的立場やオースタリーの未来については言及せず，むしろ主として彼が今や陥っている個人的苦境を訴えている。彼が時代の形成に協力した数週間後，不意の転回の中で犠牲となった自分を感じている。即ち「詩作の仕事全体が私におかれている」と。それは彼を所謂絶望的状態に駆り立てる。実際まさしく彼によって何ケ月前に強調された「時代との関係」はさて「Hermannsschlacht」の公開を阻み，他方この時代関係の欠ける「Käthchen v. Heilbronn」も人々から「殆んど興味」を持たれない。Kleist は再び自分自身に戻り読者によって自分の生活も阻害されているかに感じる。彼はまたすでに以前に得た著作によって暮して行く可能性をも，今ナポレオンの支配下で何の希望もない未来への展望の下で拒否するのである。一方 A. Müller は8月29日の Stägemann 宛の手紙の中で，Weimar 公子（Wagram でナポレオンについて戦い，ナポレオンからレジョンドヌールを授けられて戦場から戻って来ていた）の許での授業の継続に任じられるという希望について語っている，しかし当然ながら非常に迷っている。そしてまた10月25日に戦功によって Franz 皇帝から陸軍中佐に任じられた Fürst von Lobkowitz に手紙でオースタリーの政府における官職の任命を依頼した。（この Müller の希望が数年後ではあったが実現される事になったのは，Fürst がドレスデン占領中の Müller の行為を Franz 皇帝に高く評価するように仕向けたせいであるとも考えられる。）講和条約締結に対する反対はベーメンで特に強かった。プラークの人心は1809年晩秋まで絶えず戦争勃発への希望の中で昂揚していたのである。Kleist は当時 Philipp や Friedrich の Stadion と交際していた。Friedrich の方は同じく戦争の続行を弁護して周知のように9月13日にも Germania の為の尽力してくれた。プラークにおいて Germania への準備が動き出していたほぼ同じ時期に，Beireuter Krieg-Blätter が現われた。Ernst v. Pfuel 以外にも更に他の人物達がそれに書いていたのかどうかは，最初の「P.」で表わされた論文を除いて全て匿名であるので，不明である。みたところ Pfuel はこの期間プラークとの接触を保っていた。

2. ドレスデンにおけるロマン的文芸

19世紀遅くまでドレスデンは一流のドイツ文芸都市として輝いていた。画廊とそれに結ばれたアカデミーの中で数十年間，ドイツの文芸界のあらゆる変革の元となった芸術家や愛好者が次々と生まれていた。まさにドレスデンこそドイツ人のローマであった。

Zwinger の影の中で Raphael Mengs, Karl Philipp Moritz, A. J. Carstens の後に，Ferdinand Hartmann が登場した。彼は19世紀の初めにドレスデンへ来，短期間にドレスデンの人々の心を掴んだ。彼は教養ある家庭へ迎えられ，自らも大邸宅を持ち，そこへは Körner, Tieck, Schiller といった人々が立ち寄り，彼の画の前に驚嘆して立ちつくした。また一方彼は Weimar の Goethe とも知己となった。更に彼の仲間としては P. O. Runge がいて Tieck とも親しかった。彼らはそれぞれ強い個性を持ち新しい世紀の新しい文芸の

開拓者だった。Carstens や Runge と同様北部海岸の出身で，Runge の友人だった Kasper David Friedrich は風景画を得意とした。彼のオアシス風の情調を持った憂鬱そうな絵も次第に市民社会に受け入れられていった。当時博覧会評や文芸批評をあらゆる新聞に書いていたドレスデン人タイプの Böttiger は殊更に Friedrich を取り上げることなく，古典主義者 Ruhmor は烈しく彼を攻撃したが，詩人と文芸家のサークルの中では彼はまるで予言者のように尊敬された。画家 Richter や W. v. Kugelgen, Schubert, Rühle と Hartmann, A. Müller と Kleist, Arnim と Brentano が彼の味方だった。Runge と並んで Friedrich はロマン主義者たちによって名声を高めた。ドレスデンという大地に，生命は短かったが，ドイツのロマン的文芸が生じたのは Runge と Friedrich に負う所が非常に大きい。彼ら二人が前期ロマン主義への直接のつながりを持つ画家だったからである。それによってしかしドレスデンは Weimar と相容れぬ事になった。ロマン主義が Goethe を神のようにあがめたのに，Goethe の側からの文芸批評からロマン主義は見過ごされていたのである。Hartmann や Friedrich はなるほど Goethe の関心をひき，詩人でもある Hartmann が Friedrich より高く置かれはしたけれども。

3. ドレスデンの文学におけるロマン主義の始まり

ドレスデンでも造形美術におけるよりも一足遅れて新しい世界観の上に立つ文学が登場した。ロマン主義は，ルネサンス時代とも似て，あらゆる生命，あらゆる興味や関係の若返りだった。その為に新しい，より自由な社会へと先導する努力とも言えた。いつの時代にもそうであるように，ロマン主義も先入観や因陋さに直面する。それを克服するのにロマン主義はその戦略を個々人に向けずに時代に向けた。啓蒙主義の町ベルリンとは異り，ドレスデンでは全てが静かな歩みを続けていた。ここでは啓蒙主義と国家警察が独善的な仰々しい物の言い方をしなかったので，人々はまた表立った反抗もしなかったのである。ドレスデンは政治面でもこの頃は平和だったのでいわゆる「いい趣味」が高く評価された。美術館，図書館，講演会等で教養を身につける名門を誇るインテリ的俗物を生み，他のどの町にも見られぬ講演組織が作られた。1798年にロマン主義者達はドレスデンでその成立を祝っている。そして美術画廊が彼等の活躍の場となった。しかしその後彼らはドレスデンへやって来て信頼し合うサークルの中で種々の芸術論議を戦わせ，絵画を比喩的詩の中へ移し，またまもなくドレスデンの文学的な流れにさしたる影響を加える事もなく去って行った。その後もロマン派の人々が漂泊の途次しばしばドレスデンを訪れるが，旅程の忙しさから外からの大きな影響を新らしく加える事は殆んどなかった。ドレスデンに個人的影響を及ぼした最初の人は L. Tieck (1801/02年) であった。またこの町にあったのは他の町にみられるのとはいささか趣きの違うロマン主義の時代であった。ドレスデンの町の住民の保守的な傾向はドレスデンの新聞にも反映している。はるか18世紀に創刊の「Dresdner Gelehrten Anzeigen」は19世紀の最初の二年にあえて啓蒙主義的方向を目指すが1803年に廃刊となった。その後すぐ「Dresdner politische und merkantische Anzeigen und gemeinnüßige Beiträge」が「他の週刊紙の大部分を不必要なものとする」と信じていたが間もなく時と共に消えた。Langheim, Kästner, Lafontaine, Mahlmann, C.F. Weiße などと並んで Schiller の寄稿もあった「Weinbergsgesellschaft」があり，「Taschenbuch Zum geselligen Vergnügen」(1791～1814) があってこれはその明るい名にふさわしいものであった。そして Berlin が「Freimüthige」の中

で，Leipzig が「Zeitung für d.e. Welt」の中ですでに扱っていたものをドレスデンの穏健な人々はようやく1805年に「Abendzeitung」の中であらわした。つまり，旅行記，感傷的書簡，文芸報道，論評，時事ニュース等がのった。Laun が最初編集長になったが，年の終りにはその地位を退く事を強要され，その後を若い未経験の Hartmann が継ごうとしていた。そして「Blühtenblätter」が古い党派の穏かな寄稿文を載せて登場した。ドレスデンのそういう伝統に対するものとして，ロマン主義が町へ現われてその最初の「Abendzeitung」が1806年に廃刊になった後，ロマン主義的なものはより静かな影響を与えながら続く事になる。

ヨーロッパのこの時期の政治的な平和のドレスデンがロマン派の多くの人々に知れわたって，文学活動における新鮮な活躍の場を見出す為，ドレスデンへと誘われて来る者も多かった。彼らは殆んど貧しく，つましい家庭教師の地位でも満足していた。Hartmann は Böttiger 家へ来，歴史家 Dippold は若い Theodor Körner の家庭教師となった。そして２人の哲学者 Schubert と Krause はロシヤ伯爵夫人 Kroke の下で親密な厚遇を受けた。そしてやがて彼らはより上流の社交的文学仲間へ関係を持って行った。その仲間が彼らに聴き手や読者を獲得してくれた。Schubert は哲学者として，Wetzel は批評家兼詩人としてこういう仲間の中の真のロマン主義者であった。

1806年と1809年の両方の戦の間のドレスデンは新しい精神的立場も，従って精神的感動に価するものも持たなかった。がそれでもその時期は文芸的創造へのこれまでの認識や経験の転換に関して大きな意味を持った。真理と誤謬，ルソー主義と国是，古代と現代の問題性，文芸の現実とその無力さ，啓蒙主義から古典主義への道筋にあって，Kleist の古典主義への拒絶へと赴くライトモチーフは，今やドレスデンで成立し，「Phöbus」の中に断片的に発表されて行ったあの大文芸作品を残すのに寄与したのである。危機の間にあったこの休戦状態の中で文学上の場を提供したのがこの「Phöbus」であった。この間ザクセン王家はナポレオンと結んでおり，ザクセンはライン同盟に屈している。しかし以前から特殊な不一致がカトリック君主国家オースタリーとプロテスタントのプロシャの間に存在していて，フランスとの同盟を生活の中ではそれほど強くは印象づけていない。Kleist を新しく受け入れたドレスデンの文学仲間（青年時代の友人，そして Tieck とか G. Körner のような市民）はドイツ啓蒙主義の続きを代表し，一方種々の連関を通して古典的伝統と結びついている。「Phöbus」各号はそれ故，どうしてもロマン派的文学の，或いは政治的ロマン主義の道具としては考えられえなかった。

A. Müller がドイツ文学史上果した最大の功績は H. v. Kleist の文学的登場への彼の関与であるという Jakob Baxa の言は全く賛成しても良いと言える。A. Müller は，このドイツの Shakespeare を発見し，彼の力の及ぶ限り彼の文学活動を促進させた人間である。彼は当初から Kleist の中に際立って優れた才能を認めていた少数の人の中の一人であった。実際 Kleist の「こわれ甕」での失敗，Goethe との確執，「Phöbus」の失敗，「ＢＡ」における Hardenberg に対する無駄な反抗，Müller の若い時代の友人 Henriette Vogel との問題など，短時日に続けて Kleist を襲った運命の打撃は全て，友人 Müller の名と何らかの形で結びついていた。そしてロマン派の人々は Müller に対して或種の嫌悪感を持っていた。Tieck, Solger, F. v. Raumer, Köpke の判断も不公平なものであった。それ故 Wilbrandt はその Kleist の伝記（1863）の中で A. Müller を Kleist の「悪い悪魔」と名

付ける大胆な，詩的直観を述べたのであった。しかし Reinhold Steig がより詳しい広大な本源的な研究（1901）の土台に立って，特に1810～1812年の時期について，この文学史的古譚を破壊した。即ち，Müller は何ら悪魔的な物も持っていなかったし，Kleist 自身もそのような関係を意識してなかったと。ドレスデンでは他の国々が戦争で荒廃していった間に，無学者的な雰囲気を棄てていった。哲学者，詩人，芸術家が新しい派の言葉を使った。そして Körner の家でもこうした環境の中へ移って行った。全く新しい生命が開花した様相であった。その最大の部分の象徴とも言えるのが Müller だった。女性にも愛想をふりまき，生れつきの優雅さで貴族の間を泳ぎ廻って，高い地位の紳士の二・三は唯の保護者というだけでなく彼の親友ともなった。他方彼は再びロマン的素朴さで職業作家の小さな世界にも順応した。そして彼はドレスデンの指導的批評家となり，自分の人柄で人々に影響を与え，講演を行って高い人気を得た。Müller と他のロマン主義者達の関係について数多くの研究論文は明瞭に語る事をしていない。しばしば Müller の国家理論が Novalis と F. Schlegel の理解の結果として価値付けられたりしている。しかし Müller の「Vorlesungen über die deutschen Wissenschaft und Literatur」（1806）を読めばはっきりと内容的にそれとの相違が理解される。Müller の見解と前期ロマン主義の文芸理論とでは問題性の間に深い相違が存在する事が確認できるのである。Müller はその「Vorlesungen」の中で Goethe と個々のロマン主義者たちとの文学見解の対立を明示し，Goethe の立場に公然と味方したのである。Müller の他のロマン主義者達との関係についてなお存在した不明瞭さが研究を阻害したのであった。そうした中にいわゆる「悪い悪魔」，Kleist の妨害者としての Müller の印象が依然として残ったのである。Kleist の A. Müller への緊密な結びつきの理由は，S. Streller の研究（1966）の中で繰返し語られているが，その見方で殆んど理解出来るように思われる。その或程度の事は，Müller の「Vorlesungen」，「Phöbus」の出版の際の Kleist と Müller の趣旨，Gentz と Müller の交換書簡を通しても解明できるものである。Müller はそのドレスデン滞在時に，文芸的行為を個人と社会をつなぐものとして理解し，その研究を通して社会的階級のそれぞれの間の仲介の方法を見出そうと願ったので，文学的疑問に当面したのであった。

4. ドレスデンにおける A. Müller と H. v. Kleist（1805～1809年）

1805年10月初旬，Müller はドレスデンにきていた。ドレスデンの最初の数ケ月は彼の生活は殆んど変化を持たぬ物であった。変化が起ったのは1806年の初めだった。突然彼は都会の社交的文学生活の中心になったのである。彼が以前に一緒だった旧友達が申し合わせたようにドレスデンに現われたのであった。戦争の雷鳴が気まぐれを起こさせたとでもいうように。彼が住んでいた Haza の家は社交と文学的おしゃべりに開放され，美しい女主人が全ての客をその優雅さと機知に富んだやり方で魅了した。不安な国から来た上流の亡命者がここに集まり，ここはまたロシヤとポーランドの貴族達が，昔からのザクセンの宮廷とポーランドとの親しい関係のせいで，一年の大部分を過ごす土地でもあった。上品で若い教師で神学者でもあり法学者でもある A. Müller はすでに幾冊もの著書を出版していた。その Müller に最後の一押しをする為であるかのように，ナポレオンから逃れて Friedrich v. Gentz もドレスデンに現われた。その Gentz が上流階級の人々の中から Müller の講演へと聴衆を誘った。その講演はホテル de Pologne で行われ，聴衆達が一挙に若い文筆家の名を喧伝し

たのであった。「Abendzeitung」,「Georgia」,「Zeitung f. d. e. Welt」,「Der Freimüthige」が講演の一部を取り上げてその論旨をほめた。Berlin における A. W. Schlegel の講演にあたるものが，ドレスデンにおける Müller のそれだった。ロマン主義の発展の20年間で Müller に文芸講演で匹敵するのは唯 Schlegel 兄弟だけと言っても良い。Schlegel 兄弟と Müller の才能を単純に比較する事は出来ないが，講演者としては Müller の方がまさっていたと思われる。Müller は最初の冬は「Vorlesungen über die deutschen Wissenschaft und Literatur」を完成している。その講演が名声を馳せた為 Arnold 書店が出版し，それがまた大成功をおさめたので1807年には第2版の増補改定版を出す事となった。それについては Goethe も日記の中で評している。その中の12の講演の中で Müller は Shakespeare には普通の尊敬を献げるだけだが，他の名前，例えば Burke の名を Tacitus と比較する為に持ち込んでいる。Goethe は大家として述べられている。

一方 Kleist は無名の小説家だった。Arnold 書店は Müller の紹介で Kleist の「Amphitryon」を同じ1807年に出版する事になったが，これは本屋にとっていい商いではなかった。Kleistの 死後7年経って1818年に残本が新しい表紙をつけて売られた。しかしそれでも売れ残り「出版社よりドレスデン王立図書館へ，1836年」と手書きの献辞を持ったものがザクセンの国立図書館に残っている。こうした事から1807年の初版本が L. Tieck の出版した「Kleist 選集」(1826) の出版後更に10年経っても売切れていなかったと推察される。Müller が Kleist のフランスの捕虜時代に「Amphitryon」を出版した時，旧知の何人かの人々が関係した。Kleist は出版を依頼して草稿を Rühle に送り，Rühle は出版を Müller に任せた，Müller は Körner の仲介にも拘らず Cotta から拒否された時，彼自身の出版社 Arnold のもとに持込んだのだった。Müller の講演は1806/07年冬の「Über die dramatische Kunst」へと続いた。歴史的映像の中での劇，舞台，国民劇場についての見解を述べている。1807/08年冬は「Über das Schöne und Erhabene」という講演であった。更に1808/09年冬の「Die Elemente der Staatkunst」についての最後の講演は，その素材が Müller の本来の領域だったので，多くの新しい興味ある事が述べられた。Müller の「Über das Schöne und Erhabene」の冬に，Kleist の「Penthesilea」が最終的な完成を見る。Müller はその11の講演を「Von der Idee der Schönheit」の名でいくらか後の1809年に Berlin の Hitzig 書店から本にして出版する。この Müller の著作はロマン主義的美学の試作である。Müller は W. Schlegel とは Berlin で W. Schlegel の華々しい講演の時代に知り合っていた。F. Schlegel とは恐らくドレスデンで初めて知り合ったのだろう。勿論その夫人 Dorothea とも同時に知り合ったのだろう。Müller の講演は Schlegel のその影響を受けたかも知れないが Berlin，ドレスデンでの出合いはそれ以上の交遊に発展する事はなかったようである。(勿論数年後 Müller と Schlegel は Wien で再会しその時以後は親しく交際している)。Müller の前期ロマン派の人々との個人的関係は大体このようなものであり，Tieck 及びその友人達前期ロマン派との関係は学校時代の Müller と Tieck の不和が残っており，Müller は Tieck に罵言を浴びせた事もあった。それでドレスデンでの Müller の講演に Tieck が非難の言葉を述べ，その結果ドレスデンでは彼らは互いに道を避けた。Tieck が暫くして「Fortunat」の中で Müller を機知で諷すと，Müller も忘れずに「理髪師 Flint」の役の中で Tieck を戯画し返したのである。

Kleist が不快な運命のいたずらによってフランスの捕虜収容所で惟悴していた時，Kleist

の友人 Rühle は Kleist から任された「Amphitryon」の草稿を A. Müller 以上の有力者に渡す事はできなかった。Müller がさて Königeberg の草稿（Amphitryon など）を読んだ時，Müller は自分の名にまだ欠けている文学的才能の発見を確信した。そして詩人の草稿から「Amphitryon」を取り出して Arnold 書店に渡した。そして非常に注目すべき前書を用意し，それによってその喜劇を最もすばらしい奇蹟劇の傑作と讃え，Kleist をドイツ文学界に紹介し世間に知らせたのだった（L137)※)。Müller は Kleist の中に未来の詩人を見た。その詩人を彼はまた自分の政治的友人と世に知らせたのだった。すでに5月9日に Müller は Prag の F. v. Gentz に「友よ，私は君の望みに少くとも部分的には応える為に，多分他の誰よりもより良い立派なものを約束している若い詩人の，私が出版した劇を送ります」（L172a）と書いて「Amphitryon」を送り，Gentz は全くそれに感動した。そして一週間後最高の驚嘆の表現で答を書き送った（L172b)。しかしドレスデンの仲間の中では Gentz ほどに高く評価したものはなかったようである。しかし Kleist がドレスデンに来ると最初の日からその友人達との交際が始まった。ドレスデンで彼は旧友 Rühle や Pfuel と再会し，A. Müller とも再会した。Müller の優れた国家哲学と，有名な「Die Lehre vom Gegensatz」は Kleist 本人やその創作に後々まで影響した。Müller の方も詩人に心から熱狂した尊敬の念で対した。Rühle はその時丁度侍従で少佐になっていた。彼は Bernhard v. Sachsen-Weimar 公子の教育係であって，Pfuel が軍事学を教え，A. Müller が国家学を教えていた。3人とも Carl August 公のうけが良く，Kleist を伴ってその後オースタリー，ロシヤの大使館に出入りしており，出版社を作ろうと計画した時も他の本屋の持たぬ相当な縁故があった訳である。Carl August 公は，ライン同盟侯にならざるを得ぬ立場にあっても，それでも以前のプロシャの戦友には忠実に振まった。その一つとして Müffling の仲介によって1807年9月に Hohenlobe 参謀部の前副官 Rühle v. Lilienstern を次男 Bernhard 公子の伝育官に選んだ。Bernhard 公子はドレスデン近衛連隊に勤務しており，Rühle は教育の仕事における助手として Ernst v. Pfuel や A. Müller を選んでいたのであった。Kleist は捕虜収容所から解放されてドイツへ帰る事になった時，Amphitryon が印刷され出版されたドレスデンに居を構える決心をしている。Pfuel と Rühle が Müller に彼らの友人 Kleist に注意を向けさせたが，Müller としては Kleist の「Amphitryon」の出版の世話もしている事だし，そして個人的に面識が無い筈もなかった。両者は数年前 Berlin で同じ社交仲間にいたのであるから。そして Kleist の詩的発展の中で，A. Müller との関係が最も重要な転回点の意味を持つ事となる。Kleist が8月にドレスデンで Müller と出逢った時期は丁度 Müller が1807/08年冬の彼の新しい講演への準備に没頭している最中であったに違いない。それ故 Kleist との文学的な話になった時，彼らはその土台をはっきり「Idee der Schönheit」の中に取ったと考えられる。Müller は Kleist をドレスデンの社交界に紹介し，更に Pfuel と一緒に Körner 宅にも紹介する。「Amphitryon」の発表で彼の事はすでに幾らかは知られている。Kleist は幸にも暖かく或程度尊敬をもって迎えられる。少し吃るような喋り方で，といってもそれほど奇妙でもないがそれでも彼は「いささか物怖じし，人をあまり寄せつけない風に」振舞っている。彼の本性は楽しい雰囲気の中で「まるで彼の秘密の苦しみが心に巣くっているかのような印象」を与える。彼ははにかみ，しばしば放心し

※ H. Sembdner : Kleistslebensspuren, 1984年版の番号。

てしまう。「何か言われる言葉が彼を夢中にさせてしまうと，その後の言葉は何も聞こえず彼は返事をしない」。しかし彼の誠実さは感じられ，物判りの良い人達を何か魅力的なもの，彼がもたらした物か何か今までに無かったものを得たという風な気持にさせる。そんな時に彼は L. Tieck に出会ったのだった。Tieck は南の方への旅行の途次 Körner 宅に立ち寄り（1819年になってようやく Tieck はこのドレスデンに移る），Kleist との間に親しい交際が生じた。ドレスデンのサロンは Kleist にとって益々興味深くなる。Müller が Kleist の作品を朗読する。「こわれ甕」の素人上演が決められる。彼はこの上なく幸福である。希望がだんだんふくらんでゆく毎日，彼は夕方 Rampische Gasse の片隅の小さな部屋に帰りつく。ドレスデンは良い町で，空から吹く快い晩夏の風がまだ彼の心に残っている暗闇を全て吹きとばすのを感じている。このドレスデンで Kleist はかつての女友達 Henriette v. Schlieben にも会っている。そして彼は自分の運命がそのように幸福になって行くと確信した時，彼女を故郷へ連れて行く考えを持ったかも知れない，彼女が彼の結婚の幸福にふさわしく彼の「若い女友達」である「条件」を満たしたならば。いずれにしろ人々は彼を，彼女の肖像画の下にある「Kleist の許嫁」という字に表わされているように Henriette の恋人と見た。恐らく，Kleist の幸福にまもなく宿命的な変化が現われ，また Kleist の家族の彼にかけた理想の実現への希望もあって公けの婚約とはならなかったのだろう。時代の不安の影も原因となっているかもしれない。

Graf v. Duol も文芸的関心を持った人だった。Kleist は姉にそうした生活を報告している。「僕は貴姉をこちらにお招きしたい程の気持です！僕は貴姉を立派なお宅に御案内できます。Haza 邸，Buol 宅，Körner 邸など。そうした家々の中でも僕は Potsdam の K (leist) 夫人宅にいるように振舞っております。僕の２つの喜劇（一つは出版し，一つは原稿です）はすでに何度も皆さんの前で朗読されていつも大喝采を博しております。今なんと，Buol 氏が当地の素人芝居で上演を企て，Fitt（貴姉の御存知の）が主役を引受けています。……端的に申しますと全て旨くいっています。姉さん，僕は貴姉がここに来て，自分の眼で御覧になれたらとばかり願っております」（B 111）。Buol は Kleist を，Kleist の文芸的努力を支援した，「10月10日に僕は……食卓で月桂冠で飾られました，ドレスデンにいる二つの可愛い小さな手によってです」（B 114）とあるように名誉を求める詩人に強い印象を与え，政治的にも Buol に組する事が彼を安心させたに違いないように思われる。Buol はナポレオンに強い反感を持ち，すでに早い時期から Kleist を彼の政治的見地からも引き入れたかったのだろう。しかし Buol のした事はそれに止まらない。彼は Wien への，そして Wien の劇場への直接の結びつきを仲介した。特に Burgtheater と関係のあったオースタリー詩人 Jos. v. Collin へ Kleist を仲介したのだった。その結果「Das Käthchen v. Heilbronn」は幸運にも Wien で上演され，Kleist は30ルイスドールを Wien の劇場から得た。そして Kleist は更に Collin に「Penthesilea」への関心を持たせようとする。Wien への糸は段々太くなったのだろう。Kleist は姉に書いている，「もし僕が Weimar (Wien) の Theater で監督の地位についたら，貴姉は何と言われるでしょうか？」（B 111）。

Müller は初めて Kleist の名で出た作品の出版によって Kleist に文学の門を開いたが，またすぐさまこの優れた天成の劇作家の作品の上演を助けようと考えた。彼は自分の Weimar 宮廷とのつながりを利用した。即ち Fr. Gentz が1806年４月に Goethe に Müller の「Vorlesung über die deutsche Wissenschaft und Literatur」の初版を送っていた（その

中には Werther, Faust 断片, Tasso, Egmont が詳細に論じられていた)。それと Müller が Bernhard 公子の国家学の訓育を任されていたという関係を利用したのである。それで Müller は1807年7月31日に Kleist がドレスデンに到着する前に「Amphitryon」と「こわれ甕」の写稿を Weimar に訪問してから関係のあった Goethe に送っていたのであった。Kleist がドレスデンに滞在し始めたその週の内にすでに Weimar の宮廷劇場が「甕」を上演する事を決定したという通知が届いた。更に Cotta が Kleist に手紙で「Erdbeben」をすぐ「Morgenblatt」紙に掲載したいと言って来た。Goethe の以前の親しみ難さと，他の劇作家達が競って採用を願って拒まれているその難しさを考えれば，この Müller の取った手段は Kleist にとって大成功とみなさなければならない。この点について Kleist は当然 Müller に感謝すべきものであり，「こわれ甕」上演が破滅的な失敗を経験したことは Müller が責任を問われる事ではなかった。Müller は此のように自分が肩入れした Kleist のドレスデン到着を，Schlegel 兄弟が Tieck を待ったように熱心に待った。Kleist の到着で哲学と文芸の彼の夢みた結びつきが「Phöbus」という形で実る事になったのだった。（続く）

LITERATUR（論文名と著者と発行年のみ記した）

Baxa, Jakob : A. Müllers Lebenszeugnisse. 2 Bde, München 1966.

Baxa, Jakob : A. Müllers Philosophie, Äathetik und Staatswissenschaft. 1929.

Baxa, Jakob : Die "Phoenix" —Buchhandlung. Ein Beitrag zur Kleist-Forschung. 1956.

Bethke, Johannes : H. v. Kleist und Österreich. 1932.

Bongs, Rolf : Die Wertung und Geltung Kleists zur Zeit der Romantik. 1934.

Coenen, Else : H. v. Kleist im Kampf gegen den Staat der Aufklärung. (Auszug) 1921.

Eichler, H. : Zu H. v. Kleists Beziehungen zu Österreich (1808–1809). 1934.

Holzmann, Ernst : H. v. Kleist und Österreich. 1939.

Gay, Fritz : Kleist in Dresden. 1954.

Kayka, Ernst : Kleist und die Romantik. 1906.

Koehler, Benedikt : Ästhetik der Politik. A. Müller und die Politische Romantik. 1980.

Körner, Josef : H. v. Kleist und C. F. vom dem Knesebeck in Österreich. 1920.

Lechner, Wilhelm : G. H. Schuberts Einfluß auf Kleist, Justius Körner und E. T. A. Hoffmann. 1911.

Lorm, Hieronymus : Kein Romantiker, sondern selbst eine romantische Erscheinung. 1863.

Lüttcken, Anton : Die Dresdner Romantik und H. v. Kleist. 1917.

Mayer, Hans : H. v. Kleist. Der geschichtliche Augenblick. 1962.

Muhlher, Robert : Kleist und A. Müllers Freundschaftskrise. Zwei ungedruckte Briefe A. Müllers zur Geschichte der Zeitschrift "Phöbus". 1950.

Nadler, Josef : Die Berliner Romantik 1800—1814. 1921.

Müller, Adam : Kritische/ästhetische und philosophische Schriften. 2 Bde, 1967.

Phöbus. Ein Journal für die Kunst. Nachtwort und Kommentar von H. Sembdner. (Anhang) 1961.

Richter, Karin: Der "böse Dämon" in der deutschen Romantik. 1979.

Rudolph, Günther : A. Müller und Kleist. 1978.

Schacht, R. : Kleist ein Klassiker ? 1913.

Stefansky, Georg : Ein neuer Weg zu H. v. Kleist. In : Euphorion 23 (1920).

Weinberg, Ludolf : Kleist und die Romantik. 1842.

Weiss, Hermann F. : H. v. Kleists politisches Wirken in den Jahren 1808 und 1809. Mit einer neuentdeckten Originalhandschrift von "Was gibt es in diesem Kriege ?" 1981.

Willige, Wilhelm : Klassische Gestaltung und romantische Einfluß in den Dramen Hs. von Kleist. 1915.

Zimpel, Helene : H. v. Kleist und die Romantik. 1896.